Ragnarok　saga

ほか弁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒａｇｎａｒｏｋ　ｓａｇａ

【Ｎコード】
Ｎ３９３５Ｖ

【作者名】
ほか弁

【あらすじ】
正午、東京タワーの展望台から雇い主のヒルデ・シュナイゼルクと共に東京の町並みを観察していた青年――不死身の青年、梶間義人。その眼前に現れたのは一体の狂戦士。その姿を見たその刹那から、一つの確信を抱く。――こいつだけは殺さなければならないと。始動する二つの勢力。東京を舞台に繰り広げられる狩猟。様々な苦難の中、義人の心は決して揺らぐことはなく、目の前の人狼に対する殺意とかつて決して破らないと誓った約束を胸に彼らを殺すことを彼女の前で宣言する。

１９９９年――一月下旬、北欧神話は現世に蘇る。

プロローグ（前書き）

電撃文庫に今、出してる奴です。製作時間は２０１０年十月の後半から今年の一月中旬。手直しに三月まで。

プロローグ

冬の空は曇ってはいるが、雪は降ることはない。
梶間義人の妙に肉がつきにくい体と繊維の隙間を通るのは一時の冷たく凍えるような風。目が、耳が段々麻痺してくるのを感じ、反射的に目を細めるがそれでも尚、空は容赦はなく、風を吹き付けてくる。
普段なら、決して使うはずのない交通手段。それでも期待するべき用事でもあり、急ぐ用事でもある。
ようは暖房がガンガンと効いた電車では遅い。面倒だがカチの方がとても速い。

当社は実績を上げれば、その分金をもらうことができる歩合制っていうなんとも合理的な奴を取り上げており、こちらが働かなければ、その分、呑気に自分達は命令を下すだけの重役の給料になってしまう。
新人社会やアルバイト店員の人は想像するためにいらっとくると思う。
しかし、自分の生きる為に必要な金っていう奴が大幅に減るだけだ。前文から読み取れる通り、俺は重役をこの上なく、嫌悪している。俺の会社の部長から専務までの管理職と現地に派遣される職人はとても仲が悪い。
どれほどか、と問われれば、猿と犬のような仲。社内のレクリエーションでも全社員３４５６名の１チーム５３名が銃器を持ち出し、社長が止めない限りは永遠と撃ち合いをするほどだ。ゴム弾丸と説部の破壊からは全社員の通帳から差し引かれ、みんな痛い目にあうのは理解しているのに、それでも続ける。

皆、それほど大っきらいだ。自分達のまんまが食えるのは誰のおかげだ、と積年の恨みを毎日のようにぶつけたいものである。
その会社が何を生業に世界各国に社員を派遣し、金を集めているか？
社会的な問題で答えに困るが、そりゃぁ――

殺人だ。

どの世の中も自分が相手を殺したい、と考える輩が五万といるし、理由もソーセージを食べられたーとか、ゲームを貸したまま返してくれないとかそんなことで人間が人に殺人を頼むわけじゃないし、それを本人の代わりに代行して、行動を行うのが俺達の仕事。
実に簡易だ。簡易で困難な分、払われるマネーはその分、馬鹿げている。
一回の仕事につき、十五万。一か月で二回やっただけでこの物価が異常に高い東京でまんまを食っていくことが可能だ。

躊躇はないのか、と問われれば、それほどでも。相手は武装していることがほとんどであるし、会社のデスクで俺は少年兵を十人仕留めたとか、騒いでいる兵士もいるが、俺はそこまで心は痛まない。
せめて、ご愁傷様というまでだ。
夕方の全国版のニュースで殺人事件の情報が流れてもピンと来ないだろう？
人間、大抵はそんなもの。シスターやお坊さんと同じくらいやさしい人なら、多くの人は心を痛めるが、自分の思ったことを述べるまでだ。
かくいう俺も、飯を食う為に空を飛んでいる。

対象が潜んでいるのは、横浜市駅から数分の一？以上はある工業地帯。夜のため誰もいなく、隠れるにはもってこい。対象は名前というレッテルをはりつけるのならば、銃弾を避け、人間のはらわたを食い破り、周りにまき散らすことができる正真正銘の化け物。算数などの小学校で習ったことはないが、何かを破壊することに関しては秀でている。

俺は、今からちょっくらそいつを殺しに行く。

梶間義人は、好きな正真正銘の化け物だ。

■

1

９９９年一月――横浜市造船場倉庫。

――本当にいい気味だ。青い服を着た人間が呆然と立ち尽くして、自分を見ている。

自分が何をしたのかは覚えているし、自分が両手に持っていたのは、死を恐れ泣き叫ぶ公僕の四肢。

自分はそれを引っ張った。
メリメリッと肉が避ける音が聞こえ、血管から血があふれ出る瞬間は夏場、自動販売機で買ったジュースのふたを開けるように呆気ない。

「・・・いぉ・・・・・・ふ…kえぁ！」

けたたましい悲鳴。残虐性に酔いしれた頭を潤すのは動脈から溢れた血液。咲かれた動脈の隣には神経らしき細い神経。
上半身と下半身の別離。腸の一部が鉄骨から落ち、コンクリートの床にべちゃりと嫌な音を立て落ち、未だ死ねないのか男の上半身はうめき声を漏らす。

毛むくじゃらな腕が振られると同時に上半身は真っ暗な倉庫の奥へ。
下半身は十名の警察官の前へ。

血液を払い、鼻の下から目の下まで裂かれた咆哮と共に顔を見せる歯牙。

――もう弱者ではない。この身は生物界の章持つ連鎖から進化の枠を超えた存在。
人間だったころの、暴走族の使い捨ての財布だった弱い自分ではない。自分は超越した存在。
満ち溢れてくるエネルギー。人間をベーコンのように引き裂くことができる腕力。

それが彼の殺戮の原動力。彼は自分がやられていたことを行っていただけなのだ。

彼はぶら下がったクレーンの上から降り立つ。

「……警部」

「撃て。そして、円状に固まれ」

構えられる拳銃。直後の発砲。銃声は十回。金属の礫は鉄骨の上から降りてきた怪物を穿ち殺さんと音速の速さで大気の中を突き進む。

警察官は実弾を相手に発砲する場合、その前に一回威嚇射撃を義務付けられているが、この状況でその義務を守る余裕がなかった為か、誰も警部の決断を止めることはなく、警部と共に発砲を行った。

相手が人中の域を超えてなければ、確実に殺すことをできる範囲であった。

だが、だが、彼は人中の域であらず。

消える彼。

一瞬の静寂。

彼らにとってその静寂は虫の知らせを聞くようなものであった。

一秒――二秒――三秒――十秒。緊迫した空間を作り、同僚を無残にも肉へと変化させた彼を警察官達は憎みながらも互いの死角を消すように円状に。時間は過ぎていき、約一分ほど経過する。

「どうしたのでしょうか？　到底、逃げたと思えませんが」

「……知らん。警戒を怠るなよ」

「了解」

若い警察官の返答が最後に聞こえ、声らしき声も音もなく、公僕が彼を見失い三分が経過。
体には冷汗が流れ、ただただじらされているような錯覚に彼らは陥る。

「……どうやら、動いているようです」

静寂を破るような形で最も体躯が壮大な警察官の目にでかい影が捕らえられたのだ。

「こちらも補足。船の後ろに隠れました」

汗。誰かが生唾を飲む。
上唇と下唇が水分が足りないためか、くっつく。
精神力も極限状態。十分も持たないうちに誰かの精神が欠け、贄になることは予測がつく。

「……全員、体制を崩すなよ。自分がいる場所は仲間の死角だ。動けば最低で二名は確実に死ぬ。生き残ったら、俺が焼き肉をおごってやる」
「おおーって言いたいところですけど、あれを見た後はそれはちょっと」
「その言葉、忘れないように」
奢る。めったに聞きはしない上司の言葉に士気を取り戻す一同。
警察官たちは内心疑うが、彼が考えた約束はあながち嘘ではなかった。
警部は一瞬だけ前を見ず、視界の端を見てしまった。

次の瞬間――両隣にいた警察官の顔に血がべっとりと付着した。

頭上から降ってきた影。振り下ろされた拳骨は彼の頭蓋を粘土細工のように容易く潰し、次なる獲物に襲いかかる。

惨劇。そう形容するのに値するものだった。

まず両隣の警察官は首を持たれた状態で互いの頭で己の頭を砕かれ、頭がい骨損傷で絶命。

隣にいる警察官に手を伸ばそうとするその瞬間にその後ろにいる警察官達が発砲。彼は振り返らず、しゃがむことによって回避を成功。残った銃口全てが上半身に狙われていることに気が付いていたことと、とっさの対応にそこまで思考が回らなかった警察官の落ち度である。

右隣にいた警察官が足を手で掴まれ、アキレス腱ごとそれを握り潰される。

一人。また一人と仲間が死んでいく空間の中、彼らは何人の仲間が死ぬまで正気を保って入れたのだろうか？

一人。また一人。七名を超えた時は既に正気など保っていられなかったのだろう。

自分達が行動をして生き残れる確率など既に存在していなかったからだ。

最後の一人は無残にも泣き叫びながら、顔面を蹴り砕かれ死んでいった。

彼は優越感を満たす。最後に斧が蹴り砕いた頭蓋の持ち主を咀嚼しながら、僅かに残った思考が考えた言葉を既に潰れかけ、まともに答えることのできない声帯で唸るように答える。

――なんで？　どうして？　人殺しに手を染めたその時からずっと聞いている質問だ。

自分が一つの欲求を満たすために。それが正しいのだろう。だが、

もっと第三者の視点で殺された要因を回答をするのならば、彼がわざわざここに乗り込んでくるという行動をとったから死んだ、と答えるのが正しいのだろう。
日本では犯罪を犯す加害者が被害者から暴力を与えらている事例以外は要因が全て犯罪者にあると思われがちだ。だが、被害者も加害者と接触する前には加害者と接触するなんらかの選択を取っている。
これも要因に入らないわけがない。
彼らは警察官としての誇りを胸に行動を起こしたのだから、彼に惨殺されることとなった。

彼は血の海で水遊びをする子供のように飛び跳ね、歓喜を外に出す。
引きちぎられた腕が二百キロを超える巨体に耐えられず踏まれるたびに潰れていき、彼が着地をするたびに倉庫の外にも音が漏れる。
優越は逮捕された警察への復讐の成就から。
三十分。彼は血の海で遊んだ時間を現した名詞であり、

彼が三十五分までに殺されるまでの優越感に浸っていた時間帯である。

外見も機能も犬のような鼻がとある匂いを補足。耳もとある音を聞いた。

その音は足音ではあるが、独特。滑らかで、だが芯の強さを感じるようなもの。人間であった頃にも聞いたことがある。そう――人工の革に身に纏った足が前に進む音だ。
匂いと耳から聞こえる音から性別は男。足の音から解析できる重心から、十代後半から二十代前半と推測ができる。
鼻の曲がる香水や装飾可能な金属類もつけてはおらず、服から伝

わる柔軟剤の匂いと皮膚にたまった垢の匂いだけ。

無論、血の匂いなどは存在しない。

総合的な評価を言葉にするのならば、まさしく、彼は健康な日本男児だ。そこに転がる人間のように殺し合いを経験したことのない人種。たとえ、部の心得があるとしようともそれは所詮、身を守るために作られた対人用。女性の腰回りを越す上腕二頭筋から放たれる腕力とは非にもならず。

そうすれば対象の身元は興味がない。おそらくは作業用具を忘れた技師か誰かだろう。

推測は確信に。

口角が裂けるのではないのかと、考えるほど上につり上がる。

取るに足らない人間。ならば、ここで殺そう。

彼の反社会的な思想を咎める者はいない。

第一に彼の脳には門に近づいてくる青年が殺してくれと語っているように思えたのだ。

近づいてくる。迷いなく近づいてくる。

喜びに同調するように思えるよう、彼の体から水分が蒸発し熱気が立ち上る。

脚の肉はむくれ上がり、姿勢はどこか短距離走の選手が走る直前の体制に一見似ているように思えるような光景。

瞬間時速５００?。それに加え、鉄をも貫く拳。

狙う場所は下顎。そこをそれで砕く。
彼が走るたびに地が裂ける。
人間の成人男性の殴る平均的な力、１５０ｋｇ。
それをはるかに超える力で相手の顔面を殴らんと、駆ける駆ける。
秒速。その単位を超えた肉体は瞬く間に門へと達し、

瞬く間に殺された。

加速した１００ｋｇを優に超す体重を第一撃は右靴底での一撃。己が放った拳はわずかながら肉がついていた。襲撃者のものか、それとも人狼のものか、区別のできない肉が周りに飛び散りながらも、互いに目視する。
蹴りを入れて、時速５００？から放たれる衝撃を受けながらも、重心を狂わせるはずのない悠然と立つ、口角を上げた成人男性。特別に目立つような外面は存在せず、どこにでもいそうなモンゴロイド。

彼はカウンターを入れた状態から、攻撃へと転じる。
力強く屈伸を使い、人狼の鼻を後ろへと押しのけ、その足首から先がない脚に強い遠心力を駆ける。
横腹への強烈な蹴り。直撃部分からは肉が軋む音が聞こえた。当たり所がよかったのは、彼らの体が横に長いだけではない。身長２メートルを超す体躯が前のめりに倒れかけ、人がそれほど開脚せずに苦難なく、蹴られる場所に誘導できていたからだ。
予想は的中することはなかった。腹直筋へのダメージ。上体を支

える為に、必要な部分が断裂しかける。例え、戦闘を続行しようとしても、左腕は己の体を支えるために必要不可欠。
それでも狼は反撃に転じようと動く。横に広い分、振り切ることのできない故に、彼は蹴りを一旦引き、狼は膝をつく。反撃は歩行機能として働かない脚が隙だらけになった左頬に放たれる時。

右からの拳。それでこの男の生命活動は幕を下ろす。
突貫。あの時、自分の顔面に直撃した右足首は粉々に砕け散った。彼が自分より大きい肉体を壊す術を知っていようともそれは彼の強度が極端に弱いことを裏付ける決定的な証拠。
故に足がなくなろうとも戦おうとする彼を止める術は一つ。
決定的な即死をもたらすことだ。

拳は放たれる。死神の鎌の如き、線を宙に描きながら青年の顔に近づく。
その一瞬、あろうことか青年の顔が安定よく拳の軌道から離れる。ゆったりと。自動販売機の後ろに休憩がてら、しゃがみ込む土木作業員のように。
狼の放った拳は、見事宙を切り、

顔に押し付けられるのは、冷たいもの。
先ほどまで開いていなかった上着。

金色の眼はどこまでも憎悪に輝きながらも、左側頭部に押しつけられている黒いコルトを一瞥した。
なんらかの形でガソリンが引火したのか、持ち手の後ろは昼間のように明るい。

轟音が一回、鳴り響く。
それを回避した狼は回転式装銃を粉々に潰し、青年の胸に拳を入

れる。
長い沈黙。彼はぴくりとも動く気配はしない。ただただ胸を貫かれたまま浮動の体制を取るだけ。
血迷った金色の眼は己の拳が青年の胸を貫いたことを確認すると、彼はゆっくりと彼の胸から大木にもほど近い腕を引き抜こうとする。
彼の心は何もかもを押しのけ、歓喜と残虐な心で充ち溢れんばかり。
腕が抜けて、手頸。それだけがどうしても抜けない。
その直後――青年の無臭が悪臭に変わった。
腐敗などのレベルの臭いではない。まるで鉄臭さと油の臭いでいっぱいの工場が、魚肉化工場、もしくは養鶏場の一室になったような錯覚に陥る異様で新鮮な血の匂い。
止まることなく、大気も変化を始める。火の周りこむ速度に速さがまし、体に有害な期待が増えたことに彼は気づく。
体温の変化。手首を粉々に粉砕された痛みが走る。
状況の変化。逃げ場があったはずが、逃げる場など皆無になった瞬間。唯一、この場から離脱できる方法はゼロ距離地点にいる最凶の存在を倒すこと程度。
彼の脳は演算を始める。
生存確率一％にも満たず、その状況でも彼の脳は勝つための行動の方程式の演算を始める。己の生死の決定権をこの手に取り戻すために。
静寂。どちらとも動きはしない。一方はTシャツに赤い染みを浮かべたまま。もう一方は恐怖と打開策を考えていることで呼吸が徐々に速まっていくことが解るような状態。

ここまで力の差を見せつけられて、抵抗する原動力。
それはただ単に狼にとって、彼が気に食わなかっただけ。

自分が人間だった頃の姿よりもバランスがとれ、端正な顔立ち。弱くもなく、敵に慈悲の一つもかけはしない。何より人間の形をしている癖に強さどころか、総合的な身体能力さえも自分達を超えているところがどこか妬ましかった。
環境も捨て、人の言葉も捨て、遊ぶということさえも日に日にできなくなり、血液に溺れる。
自分のかけたものの全否定。それがとても気に食わないのだ。
故に己の姿を見て、脅えた人間はすべて殺害した。この力は彼にとって生きるために必要な誇り。　例え、どんな事情を知っていようとも人間は自分達を拒み危害を加える。
ならば、正当防衛だ。ニンゲンがマラリアを恐れ、蚊を殺したように自分にも殺す権利はある。

決められた強固な決意。
青年は狂気に満ちた笑みを浮かべ、彼の両頬に手を固定する。

二つの方向性を帯びた万力の如き、力。頭蓋は声なき悲鳴を上げる。めり、めりめりと。
彼の頭蓋の悲鳴が反響するように赤銅色の柱が落下。微動だにしない彼の背後の火の海に盛大な音を立て、火の粉をあげ、落下する。
顎を固定しているはずの骨とその周囲の骨が砕け、破裂した皮膚から傷が流れ出す。
突き刺さっている手首から先を引きちぎり、傷口を埋めるような形で詰まっているそれを抜き出し、それはごみのように燃える劫火の中へ。

懺悔するような形で、そこにうずくまる彼。

意識が消えていく刹那の中、彼の眼球が捕らえたのは、自分が与えた傷口がひとりでに再生する実に奇妙な光景であった、

プロローグ（後書き）

雑だと思います

第一話　やってきた奴。（前書き）

自分が影響を受けた作品は『ジウ』。主人公は基子さんと雨宮さんらへんをイメージして書いています。

第一話　やってきた奴。

1

晩御飯を作るのが面倒だ。これを路上で叫べば、マミーと同居しているＴ大を受ける高校生はともかく一般の浪人生、大学生の半数が指をさして、この意見には賛同する。うん、それは間違いない。

別にこう答える人間の半数が暇なのではない。この上なく、くそがつくほど、忙しいのだ。短大生は勉強に追われ、大学生はレポートに追われて、一回の商社に勤める独身の社会人は割り当てられた書類に目を通しながら、意見を記入したり、取引先のリストを作る作業に見舞われる。

俺は後者だ。業務連絡のレポートの作成が終わっておらず、ガスコンロをつける暇もない。なので、近くのコンビニで夕食購入した。メニューはサンドウィッチセット３５０円と腹を膨らませるために１００円の缶の黒い炭酸水。そして、食費には関係ないのだが、月刊のサッカー雑誌もついでに購入。

仕事が終わり、どこかやるせない罪悪感など一片も湧くことなく、雑誌以外をジャンバーと同じ素材でできたリュックにしまい、俺――梶間義人はそれを駅のホームで読みふける。

周りは携帯電話を持った女子高生が一人。ぺっこりぺっこりと頭を下げるバーコード頭の親父が一人。飲みすぎたのか、べろんべろんに酔いつぶれた同年代の男が一人。見知らぬ他人が見て、表現が困るほどに請いすぎる化粧を顔に施したＯＬが一人。

それ以外は乗り合わせる人間はいない。

終電なので妥当といっちゃ、妥当のできる組み合わせだ。

天気は真っ暗な曇天から雪が降るほど寒い。そして、何気に雑誌から注意が行くのは、彼らが持っている携帯電話だ。
ＯＬも、下腹部が出ていることは厚着の上からでも判断のつく太ったバーコード親父も、男とけんかをしたのか、いかにも不機嫌そうな女子高校生もこの電車がホームに到着する１０分前後の間、ものすごい速さでボタンを連打しまくる。

……すげぇ、その一言に限る。
もう一言で言うと、これを持ち続けていこうとする意欲を失せさせる光景だ。
俺は携帯電話を今の今まで使ったことがなかった。いや、４、５年前からブームが巻き起こり、学校にいる皆が皆、持ち始めた時から微塵も興味がなかったわけではない。ただ仲がいい友達が皆が皆、必要としなかっただけで、俺もそこまで必要と考えるものではなかっただけだ。
家には電話があるし、女沙汰にも興味がない。
メールも事前に電話で話せば、済むこと。

携帯電話をわざわざ出向いて、持つ理由がどこにあるのか、理解ができなかったのだが、姉の結婚から俺の考えていた理念が覆される。

当時、２３歳の姉が結婚したのは６年前。当時、高校一年生だった俺には持つ必要がなかったのだが、次第に月日を重ねることにとある要因が生まれてきた。それは第一子誕生。晴れて俺は叔父となり、高校三年生の春から忙しい日々を送ることになる。

姉は警察官だ。義理の兄も警察官だ。姪っ子は次第に大きくなり、

誰が面倒を視ることになるかと問われれば、もちろん、武家屋敷のような場所に居候に決定権はなく、手伝わされることになる。

業務内容は、保育園の送り迎えに、洗濯、弁当の用意。

終わると学校があり、授業は疲れで睡眠で終わる。帰宅時に姪っ子を回収し、家に帰れば、すでに出来上がった洗濯物を干し、そこから3時間、勉学に励む。夕食を作り終え、明日に向けて寝るはずなのだが、だいぶ遊びたいので、遅くまでゲームをする。

とにかく忙しい。それに二人の休みの日は週に一回程度。大抵は訓練の疲れか、寝ていることが多く、家事に率先することが少ないはずなのに、俺がやろうとしたことはいつのまにかすんなりとやっているので、くたびれ損の骨売りも受けになることが少なくはない。そんな日々が、

2、3か月続き、渡されたのが兄の携帯電話だ。

案外、これが役に立つ。早めに帰って、食材のある時は、連絡がつき、食費を無駄にすることや行き違いになることはない。

俺のフレークの缶詰のようにぎすぎすに詰まった時間は改善された。

姉が長期有給を取る事に成功し、俺は高校二年生の夏に強いコネができた当社に入社すると同時に忙しい日々が終了。

携帯電話は兄に返し、その間、移動中の連絡手段として、活躍したのが、会社から支給された小型のポータブル機。国内有無問わず、連絡がつけられるので、こちらとしても携帯電話の海外へ受信する際の料金がなくなるのでお得だったのだが、ここ最近、海外ではなく、日本で仕事をすることが多くなった為、丁度、1か月前に契約したのだが――。

「……よくやるな」

人間、ここまで格差をつけられると、やるなと言われても、ドン引きしてしまうようだ。

そう考えることもばかばかしく思えてきたので、再び、雑誌の記事に目を通す。

今月号はオリンピック選手の特集。誰が選手として選ばれるか。どの国と対戦し、高さがあまりない日本人選手がどう他国の選手からボールを奪うか。そんなことがだらだらと書かれていた。

読みふけて、１０分。反対側に走る。電車が走り、電車が到着する音が聞こえ出す。

その中、雑誌に夢中だったのか、上着のポケットが揺れだしたことで現実に引き込まれる。

開ける。見る。

電話番号からすれば、３人のうちの誰か。自宅の電話から連絡をつけているところから、できるだけ姉であって欲しくはない。

「梶間です」

電話をつなぎ、答える。

「もしもーし、義人君？　僕だよ。ヒデ」

相変わらずのテンションの高さ。呂律がわずかながら回っているところから、酒が入っているな。

「ヒデさん、酒飲みました？」

躊躇することはない。この兄にこの質問を躊躇すれば、面倒なことなる。
兄がのんでいるのならば、姉も飲んでいることは確実。
何かと上の連中の餌食となることが多い末っ子は用心深くなることは真実だ、に一票。

「飲んでいるよ？　正月早々、業務が入ったからね。少し旧正月よりも早いと思うけど、早めにうさばらししているよ」

何気に上司の不満を愚痴る兄。
名前は松木秀彰。通称、ヒデさん。この人の性格を三行でいえば、楽天家、反抗の塊、ドスケベ。一度職場をのぞいたことがあるんだが、全員が全員、こじんまりとしたデスクの上に、漫画やゲーム機を置いて暇を紛らわしている一方で、夫婦喧嘩の要因となるエロ本を堂々と読んでいる猛者。自衛隊やＳＡＴよりも軍隊じみた警察組織の副長らしくないと言われても、俺にはフォローすることはできない。

そんなヒデさんは相変わらず、通話中にもかかわらず、酒を一杯飲みほし、

「ところで義人君――」

「行きませんよ。姉のもとには」

予想のつくような言葉で俺を誘った。
電話の向こうでは、姉が姪っ子とバカをやっている声が聞こえる。

「考え――」

「行きませんよ」

反論は許さん。ぶっちゃけるとあまり姉にはかかわりたくはない。

「へー、由宇ちゃんが会いたがっている――って言ってもこないよね？」

「行きません」

聞こえてくる踏切の音。

「じゃ、切ります。あまりものがあったら、そっちからこっちに分けてください」

「ちゃっかりしているねー。でもね、本当に別に気にしなくてもいいんだよ？　たぶん今日も明日も寝室から出ないと思うんで、夜なら気軽に来てもいいよ」

電話を切る。今さらだが、松木家も梶間家ほどではないが、常識ってものはない。ヒデさんは身内でもうざいと思うときがあるし、姉は上司に出す書類を郵送する際自分の名前を忘れる。

姪は姉に似たのか、馬鹿みたいに運動神経が高く、男の子をよく泣かして帰る癖は今も健在だ。

梶間家の非常識な面もそれに似たようなものだ。

母親は俺が五歳児のころから捜索届が出たまま。父親は元自衛官だが、現在進行形で無職。そのため、七歳から別居。祖父も同じく自衛官だが、二年前無免許運転で死亡事故を起こし、服役中。

そして、選挙の時に本業の欄に民間軍事企業社員と書く俺。

あまりにも非常識すぎて、到底、日常では生きていけない。

そう考えていると電車が鳴り始めて、三十秒が経過した。雪が降る夜を照らす二つの光源。車体の数は込まない時間帯と見越したのか、立ったの二両。車両内は案の定、スカスカ。新聞を片手に睡眠をしているおっさんだけだ。

ゆっくりと足を前に突き出し、車両の床を踏みしめる。とたんに吹いてくる暖風。寝たら死ぬこと間違いなしのホームとは大違い。疲れと酒さえ体にたまれば、睡魔に負けてもおかしくはない。

汽笛のような高い音が鳴り響く。電車ががったんと動き出し、早々奇妙な光景が目に付く。

ゆっくりとこちらに近づいてくる白人の女。知り合いではあるが、あまりかかわるととんでもないことに巻き込まれるので、姉と同等のレベルに位置するため、見て見ぬふりに限る。

雑誌の記事に視線を落し、やりきることを考える。

あいつが俺の前でとまるのは五秒後。

一、二、三、四、五。

……何も変化がない。

雑誌ごしに聞こえたのは合図の音。奴は立ち止まることはなく、そのまま先頭車両と後方車両のつなぎ目を乗り越え、後方車両へと。

三十秒が経過。五輪に出てくる外国人選手のスタメンの写真とポジションが掲載されたページに手を掛かったところ、案の定聞こえてくる女の掛け声。

「うわ！」
「ひぃ！」

聞こえてくるのは乗り合わせた乗客の悲鳴と、とにかく低い中年おやじらしき悲鳴。

そして、訛り前回の聞きなれた日本語での怒声。その発生源は間違いなくあれ。乗客乗員騒然。唯一、乗り合わせたメールを打っているはずの女子高校生さえ唖然となっている。

止めるつもりはない。流石にこの厳しい就職氷河期の中、減給は勘弁だ。

例え、姉が動けと命令しようとも動くつもりはない。

「おっらぁ！」

十八番の顔面への回し蹴りが決まったのか。へこんでいるな、顔。

それからは車掌さんの大きな叫び声が聞こえるだけで、女の怒声は聞こえない。

次第に女性の泣き声が聞こえてくる。男としては厚かましく思えるが、この様子だと悲鳴を上げた中年おやじはお縄となるようだ。

こつ、こつ。填補の速い足音が聞こえる。おそらくは鉄のそこを持つブーツか、それとも血がべったりと付いたヒールか。流石は重役。外道、容赦極まわりない。

左視界に銀の頭髪が揺れる。

それから長い長い沈黙が。俺は雑誌に落し、奴はカバンの中から、水筒を取り出し、休む間もなく飲み干す。わずかながら汗と熱気を帯びているところから、有酸素運動をやりきった後のようだ。

ページをめくる。ジャパンと戦うドイツの戦略法を馬鹿みたいにだらだらと掲載された記事が、主力選手の写真とともにびっしりと。

それに視線をぼーっと落とせば、そいつの後頭部が左ページの上に位置し、とにかく邪魔である。

「なるほど。ドイツ？　ユーロ圏の経済大国だから、とにかくオリンピックに力を入れているし、うん、悪くないカードだとヒルデは思います」

あからさまに発言を求めるような発言。俺にもたれかかった銀髪、金色の目を持つハム、ベーコンレタスサンド至上主義者の体重は、より一層と俺の体にかかる。

しゃべらない。そう鷹をくくる。後々、中東らへんに二ヶ月ぐらい飛ばされるのは御免だ。

「どう思うー？　よーしと君」

時間の経過とともに俺がしゃべらないことを気がついたのか、視線をこちらによこし、情報に敏感なソレは俺にそう催促をしてきた。

結果――。

「日本が勝つ」
「やっぱり、義人かー」

黙れジャーマンが。何を嬉しそうにしているんだ。
ヒルデ・シュナイゼルク。国籍アイスランド。祖父が民間軍事企業を設立し、そのスペシャルアドバイザーとして六歳児から活動してきた文字通りの天才。一見、アルビノと間違ってしまうほど、髪は白に近い銀であり、地毛である。
こいつは生まれは金庫の中。正真正銘の要人。
そして、こいつは俺の雇い主。
こうして何の電話もなしに来たのも、例の化け物の異常発生が原因と見受けられる。純粋な力の戦い方では、虎を易々と倒す其れは俺の耳元に話しかけるような形で語る。

「EUからの依頼。経済不信が続くスペイン共和国の自腹なんて、久々でーす」

それは珍しい。ギリシャ、イギリス、ドイツあたりからの依頼かと思ったが、スペイン。よほど切りつめた情報を手に入れているのか。

「対象は議員の不正摘発」
「何故？」
「どの国のスパイも干渉できる日本においているところから、すんごい価値が入っているんじゃない？」

にんまりとではない。どす黒い金がかかった時の顔が浮かび出てくる。殺し屋が殺すことの意義を心に抱くようにこいつは依頼を受けて達成することに何の躊躇もない。例え、女が絡もうとも、老人

が絡もうとも子供が絡もうとも、こいつは俺たち兵隊に射殺を要求する外道。
その外道が執着が湧くことと言えば、金か、ゲームか、それとも得体のしれない何か。会社の化け物狩りが業務内容に入ったのも、それだ。
勿論、金の入り具合も出具合も激しい。そのコストを減少させるために、俺が正規的に雇われた。

つまりはこの件も俺が投与されることは必然的だ。
見れば、期待をしているそれ。

１９９９年一月、二十三日――半年明けの仕事を依頼された。

■

――　現地時刻、十時六分。スペインの片田舎。

爆ぜた。食事の途中で最年少の腹違いの子が吹き飛ばされ、兄らの後ろに消える。
崩壊した家を包む業火の中、現れたのは銀の髪の少年の完全な裸体。まっすぐではない歪みきっている不格好な槍を有し、彼らの弟が食していた生焼けのそれを齧る。
口に合わない。高位のものしか人語を発することのできない彼ら

といえども、それだけは到底理解のできる事実である。

「冬はいいな。ぐつぐつに温まった黒ビール。ベーコンもおいしいし、サラミもいい」

大きな独り言。彼はしゃがみ込みながら、彼が食っていた肉を見下ろし、仰向けに転がす。

しばらく視て、考えこむような形をしながらも、後ろから飛びかかってきたそれをはじき返し、決心が決まったのか、転がっているそれの身ぐるみをはぎとり、それに腰を下ろす。

「特にジャガイモもおいしい。そこにあっつあつのチーズを乗せて、フィッシュ&チップスと一緒に食べるんだ」

少年はただの憂さ晴らしだと言わんばかりにべらべらとしゃべる。そこに警戒態勢という四文字はなく、まるで十年来の友達と話しているようなものだ。毛布を中央へと。近くのまだ燃えている家の角材を突き刺し、一か所に集める。

投げられる衣服。

「誰か人語をしゃべれる老体はいないのかな」

少年の発言に戸惑いを隠せないそれら。奇怪な言葉を発し、圧倒的な存在感を誇るそれらでも彼の性質が読み取れはしないのだ。

聞こえる音。奥から現れたのは、大きな大きな巨体。高さは十五メートル以上を超え、体長はどのような長屋を合わせても届きはしないほど長い。

獅子の体を有し、人の顔を持つ怪物は牙と牙の間からは、唸るような声を上げる。

「ニンゲン。何ヲ言いたい。我ラはわずカながらの肉ヲ食セバ、一

か月、生き残れル。生物界の連鎖として目をツブれ」
吐息がかかるほど近寄った巨大な人面に彼は吐息をかけられ、鼻を押えながら、顔をしかめる。
漂ったのは、おそらく人間の血が歯という歯にこびり付き、悪臭を漂わしているのだろう。
「まぁそう急ぎなさんな。そこに横たわればいい。戦いに来たんじゃないし」
存外に敵の意見は聞かない性格ゆえか、怪物の長は立ったままの状態に。
彼はそんな様子を見ながらも、懸命だ、と呟きながら、目の前に広がる百余名の敵を見渡し、こう高らかに宣言する。

「まずはじめに、人肉はまずい」

いきなりの発言。彼は笑みをこぼしながらも、距離を詰めることのない獅子達を見ながら、語る。
「とにかくまずい。口に合わない。こんなことなら、牛でも襲ったほうがよかったかもしれないな」
豪語。
「君らは人の肉がおいしいと思うのか？　僕には確かに似たような姿形の人間が食われる様を見ているから、まずいと思ってしまうのかもしれない。だが、それを平静と行う君たちも人間の目から見れば、来るっている。そういう君らを総称して――」

「化け物って呼ぶ」
あからさまな挑発が言い終えるとともに群れの奥へと全力で投げられる大腿部の肉。それにつられ、人間の音ほどの人面の獅子がつられ、走りだす。

「はっはあー、やっぱり君たちは化けものだ」

確信。

殺す。食う。

どちらも一緒。人間はなんでいただきますと敗者に祈りをささげるのか。彼ら――人面の獅子にとっては到底分らないことだった。

人間を食って、どうして化けものだと非難される。

それぞれ固有名があるのに何故、そうやって決めつける。それが許せない。

「ワカき、にンゲン。ナニガ言イたい」

聞こえる怒りの声。

槍は天へと突きだされ、高らかに宣言する。

「神聖なる決闘をしよう」

聞きなれない言葉。その言葉は地球のものとは思えない発音をする奇怪な言語を使う喉には到底、習得に時間のかかる言葉であった。

「……ケットウ？」

「ケッ……トウ」

復唱。人間界に足を踏み入れ、こうしてニンゲンが話した言葉を年長者が話す。

「勝者ヘノ……報酬ハ」

怒り滞った長の発言。

「一回限りの敗戦者の身柄、要求の自由。敗戦者は速やかにそれを実行に移すこと」

殺意に淀んだ目。口角は限界までに広がり、彼の歓喜がどれほどのもかと表している。

いくら待とうとも返答なし。獅子の長も発言の撤回の拒否を要求することはない。

承諾の確認を終わった少年は、女性の体を瞬く間に強風の渦で木っ端みじんに消し飛ばし、槍の型を数回振り回すと、槍で地に無数の文字を書きつけ、相手方は既に勝利の確信に満ち溢れており、獅子の赤き尾が甲殻に覆われし、サソリの尾となる。

――我らはマンティコア。赤き毛皮を有し、地を駆け抜ける人面の獅子なり。

たかが異能を身につけただけの人間に負けることはあらず。

おこがましきその思想、死んで悔やむがいい。

第一話　やってきた奴。（後書き）

どなたか１９９９年のカレンダー持っていませんか。

第二話　胎動

2

聞こえてくるのは、そんなに大きくはないエンジンの音。後ろの車は俺達をどんどん追い抜いていくが、それに対して、後ろの追い抜くよう檄を飛ばしてくるほど馬鹿じゃなかったようで、こっちは大助かり。

場所は国道ではなく、高速道路。

移動手段はスクーターもどきの大型2輪。

詳細を細かに説明すれば、姉が十六歳から二十歳まで乗りこなしていたお下がり。たまに錆びついたマフラーが落ちるところや、シュレッダーにアダルトビデオを突っ込んだときの様な音がそれから鳴るところから、高校で比較的親しかった友人たちからは、ぼろが来ているように注意されるが、使っている側からするとそこまでひどいとは思えないんだが、客観的に見れば、とてもひどいらしい。

速さがでない原因は稀にパーツが落ちるような年代物だけではない。

後ろからわずかながら、感動。それは日本人がピラミッド、自由の女神、女や男が異常に鍛えられたまっするパフォーマンスを見たときに似ているような似ていないような……。

「おお、あれが東京タワー？」

「見ての通り。外国人が日本に行ってみてみたいランキング第1位。流石、期待は裏切らない」

……肩書きだけで表現されても、よくわからん。

「どこがすごいのか3行弱で説明してくれたら、うれしい」

スピードがでない根源はふんふんとうなずく。

「なるほーど？　義人さんはあの真っ赤なタワーの魅力が解らないと？」

俺だけじゃなく東京都民の７０パーセントがそう、答えると思う。やけにテンションが高く、声も甲高くなったヤツはこう語りだす。

「自殺スポットｂｅｓｔ１００に入っているエッフェル塔よりも見ていて、そんなに不快にならないし、あれが一番被害が出た戦後２０年にできたなんて、すごいじゃない」

ここまでは正論。段々、ここから話の話題が離れていくのに足立区商店街、１枚８０円の激ウマメンチカツを3枚かけてもいい。

「確かに世界遺産コウリュウやオーストラリアのエアーズロック、日本ならフジヤマも惜しいけど、そう考えると日本人の底時からを感じるから、他の世界遺産よりも外国人の心をくすぶるんじゃないの？」

その言い方だと、自分が牧場犬が誘導する羊の群れを見て、興奮するような日本人と同レベルってことになっていることに全く気付かないそれ。

日本人が米を食べて、うまいが、そこまで感動することのないよ

うに、これを見て育ってきた俺には一生かかっても理解のできない現実。ようは何を見て、興奮をしているのかではなく、何を感じて興奮をしているか。到底、見なれた自分たちからは理解のできない凄さに興奮するこいつらをニンゲンは変人と呟く傾向があるが、俺はそんなこと本当にどうでもよかった。

本人がそれでいいと妥当しているのだ。それを他人がどうこういう必要はないし、変人と妥当するのは人に思想を押しつけている証拠を暴露しているようなものだ。

俺はこいつが最も伝えたいことを理解していないのに解ったようにこう返答した。

「つまりは普段見ていないものを見たことで、素晴らしいと思ったってことだろ？」

長い沈黙。

前方には緩やかなターンと次第に見えてくる料金所。

３０分も掛からない距離。

奴は何も話さない。ふさぎこんだまま。

「どうした？」

奇妙なので、試しに話しかけてみる。勿論、後ろを向いていない。

しばらくして、そっとなでられる肩。体重は俺の背中に全部掛か

り、やけに寒気を感じる。
後ろを向いていなくても、どんな状況下は理解できる。
「賭けをやりましょう」
ぼそりと呟かれる宣言。
最新鋭のデジタルカメラが風に揺られ、規則的に背中に当たる。
「賭け……」
「そ、賭け。勝った方が今日の昼食代を払うの」
昔の入れ知恵があだとなったか。そんなことをやっていたような覚えがある。
ゆるやかな９０度のターン。後ろの奴の前髪が頭部に当たり、カメラがまたしても煩わしく背中に当たる。
そこまで硬くはない腹に絞められた腕がこれまた強くなり、窒息を招きそうになる。
「オタクの聖地秋葉原で私が声を3回、掛けられる……」
……反則だ。それは。
まずこいつが異郷の地に出向いて、人に話しかけられたなかったことはない。事実としてこうして高速道路を飛ばしていても、ヘルメットに入りきらない髪が外に漏れている為、通り越し際に強い視線を感じることが何度か。降りれば、もっと酷くなることに間違いない。
「反則だ、それは」

虎がらの服を着たおばちゃんに拉致られ、食材を生で食わされてもおかしくないほど力の籠っていない声。
奴の細い腕はさらに強く巻きつく。
「拒否権はありません。人の話を聞かないってことはそんしているよね？」
感想。こいつとは2度とバイクに乗るつもりはない。

案の定、歩行者天国に入った途端、熱い視線が突き刺さる。日本人と白人が歩いていること自体、珍しいと思うんだが、携帯電話に搭載されたカメラのシャッターを切る音が1分ごとに1回。どうやら、染めれば自分の髪も似たようになることを気づいていないようだ。
当の依頼主はそれにこびることなく、まるで彼らがいないものと考えている。冬場なのにソフトクリームを片手にたこ焼き屋、もしくは電子器具店に突き進んでいく。そこで待っているのは相変わらず、暑すぎるカメラの話。その話し方はどこか、そこらへんでアニメの話で花を咲かせているオタク達と変わりがないように思えるが、本人は頑として否定することだ。
ようやく二人とも両手に食べモノと服などの袋でいっぱいになり、近くのカフェなどで消費できるものは消費することになった。

「ほほー、ここがオタクの聖地秋葉原でございますか。写真で見た時よりもごたごたとしていますね」

相変わらず、疲れを知らないそのしゃべり方がどこか癪に障る。

「少し黙れ」

「ヤー」

何がヤーだ。何が。話を聞かなかったら、一介の派遣社員に欲しいものを片っ端から奢らして、自分がつかれたら、このさま――普段はそこまでは不快に思わないのだが、ここまでこちらの身を考えない行動の仕方は金が絡まない限り、到底ついていくつもりはない。

バイクの上での騒動から約2時間。

時刻はすでに正午を回りかけ、歩けば、ゴシックロリータファッションの女や格闘技を着た男などが従来を平気で歩いているかなり偏見される理想郷の中、やはりこいつは特に目立った。女のコスチュームを着た肉付きのいい中年おやじや道路のど真ん中でティッシュを配っている奴よりも存在感が溢れている。

原因はこいつの髪の色と容姿。どちらとも日本ではお目にかかれなく、女子高校生が人形やらなんやら叫んでいるが、こいつの内面は限りなくデーモンに近い。

とうのアッシュブロンドと総称されていたような覚えのある髪を持つデーモンは近くの看板を見ながら、自分勝手な作戦を考えているのか、買い置きしていた清涼飲料水をゆっくりと飲み干し始める。

まずはじめにこいつの髪は異質ではあるが、漫画でよく見る生まれつきではない。

かといって染めてはいない。一見、そう見えるが、染め直すよう

なことをした覚えはない。

ならば、消去法で考えていくとこの腰まで伸びている癖のある髪は地毛。外見はアルビノとほぼ変わらない。変わっているという点は目の色素が生まれた時の金だっていうことだ。

商人の長としては目立って好都合と考えているが、内心では気にしていることはこいつのカウンセラーをしていた自体から聞いていた。

だが、現実は違い、その点、携帯のカメラ機能でとられても、憤慨しないところから、こいつは自分を被写体にされるのはすでに慣れているということだ。

情報のソースはどこか？　こいつの爺だ。1年前に盲腸でぽっくりと言っていしまったと聞いている。

3分。奴が黙っていた時間だ。

「どうするの？」

「は？」

突然の問いかけに対応に遅れる。清涼飲料水のペットボトルをぐしゃぐしゃに潰しながら、奴は2回、同じことを言わせるようになった俺に不機嫌そうにこう答えた。

「だから、これからどうするのー？　つまらなさそうな顔をしてー。そんなんじゃお金や幸せ逃すことになるよー？」

まくしたてるような言葉ではなく、ゆっくりとどすの利いた発言。

表情を曇らせたそれは、満更切れかかっていることは変わりがない。
「計画……お前がたてていたんじゃないのか」
首を横に強く降るそれ。
そこまで驚きはしなかったが、まさかここまでとは思いもしなかった。
「……おいおい」
「いいから、言ってみてよ。どんな案でもいいから」
この発言にとりあえず、自分の浮かんだ最大の願望を答える。
「熟睡」
「却下。せっかく来たのにそんなことするなんて」
「それ以外にない。こっちは徹夜なんだ。余力のことも考えろ」
正論だと思う。自動車免許を持っていないこいつが大型2輪をぶんぶんと駆けまわすことは法律で禁じられている。満更、秋葉原を楽しんだんだ、ここで帰ってもそれほど思い残すことがないと思うんだが――どうやらそんなことみじんにも考えていないらしい。
奴は不機嫌そうにぐしゃっとふたを閉じたペットボトルを潰す。
「ひぃ！」
聞こえる悲鳴。カフェを運んできてくれた店員さんの悲鳴だ。
「こ、こ、こ、コーヒーとバニラシェイクのお客様でででで、す、ね？」
振り返れば、死にかけの猫のように痙攣の数が毎秒2回ほどの営業スマイル。あっけらかんとしている自分とは違い、周りに席を取

っていた人間も一つずつこちらから遠ざかっていく。

「バニラシェイクでーす」

「アイスコーヒー」

ほぼ同時の提示と挙手。店員さんは注文をした品をおいて、そそくさと店の中に逃げ帰っていく。

「自動車免許持っていないだろ？」

「私が運転するから、大丈夫」

長く続くにらみ合い。やけに殺気立った目。これ以上の喧嘩は周りに迷惑か。

「解った。俺が考えておいてやるから」

久々に目を丸くして驚く奴。何かおかしな発言をした覚えはないのだが、まるで自分の常識の中のそれを逸脱したものを見たような顔。先ほどまでの怒気は既に顔も出してはいない。

「あれ、もう少し抵抗すると思ったのに」

「精神年齢どころか、機転も全然回らないな。相変わらず」

ぼそっと毒を吐く。そこまで効果はなかったらしく、むっと顔をしかるやつに軽く話をそらすことにする。

「スペイン政府からの依頼があったらしいな」

今度も心底驚いたようらしい。情報管轄部でもなく、上層部でもない戦闘員がそんな情報をどこに手に入れたのか心底、予測のつか

なかったらしい。

「うわ、私、言った？」

「出かける前、トイレの中ででかい声で通話していた」

スペイン郊外の森での大火災。１０００人単位の村だったのだが、生存者はおかしなことにゼロ人。火災発生時刻は１０時から１１時の間とみて、大抵の人間が起きている時刻にも関わらず、誰も逃げきれてはいない。

スペイン警察消防の上層部は議会を開くことはせずに外国の一回の会社の社長に頼み込んだ。

レポートを書きあげ、パソコンから本部へと送りつけた直後の状況を簡潔に話し、奴は焦ったような顔をする。

「締切は今日の夜。夏休み最後の日、宿題に手をつけていない奴が遊びまくることと同じように思えて仕方がないんだ」

「うぐ、いたいところを突いてくるじゃない」

「案を考えていて遊んでいるんだろ。教えてくれ」

形勢逆転。逃げ道を潰したことでこいつは後に引くことも、自分の意見を通すこともできない。

万年金欠の相手に後れを取ることは自分のプライドに許せないのだろう。

「考えチューはなしだ」

念には念を。釘をさせば、あいつは爪を噛みながら、こう呟く。

「……チューってところ伸ばした？」

「伸ばした。それよりもほら、早く行っちまえ。回答次第では東京タワーにも上れるぞ」

歯でゴキブリをつぶしたような顔をし、こいつはそれからもの

１０分、黙り込んだ。途中で漏れてくるあーだこーだという声は今さら考えていることを証拠として裏付ける。

「まとまった！」

両手を勢い良く付くことで机の上の空のマグカップが若干、浮かび上がる。

そして、４チャンでやっているような落語お決まりの台詞だ。この外人が全セット持っているビデオだ。

「では、ヒルデさん言ってみなさい」

「はい、どこぞの馬鹿がやってくれます」

「没」

馬鹿さ加減と人任せなところはいまだに健在のようだ。

「じゃ、どうするのよー」

「俺は参謀部じゃない」

大抵の同業者は作戦を立てるところから社員全員で考えていることが多い。それは、当の本人達が社長が考えた作戦の意中をついてきたときにどう行動をし、どう見方が援護するのかを考えている必要があるからだ。だが、貨幣さえ払えば、人の人権を踏みにじって大量虐殺を決行する本社の社員はこういう上層部はそんなことを考えず、俺達実行部隊は極秘情報には全くの無縁。だから、稀にはずれのくじを引いて、たくさん積まれた敵の土豪の中で皆殺しにしながら、たてこもるなんてこともある。

今さら、一緒に考えてくれと呟かれても、無理な要求だ。

「質問が悪かった？」

「質問がこの上なく悪い」

無神経の言葉にあれは机に大げさにひれ伏す。

その間もぶつくさと。周りのオタクがうらやましそうな顔でこちらを覗いているが、このめんどくさい性格に対応しているこちらはあまりいい思いはしない。

「なら、なんでもいいから答えて。頭がパンクしそう」

「物資の補給を最優先にすればいいんじゃねえの」

銀のウェーブのかかったもさもさとした頭がぴくりと動く。

「返却期限は無期限。衛星兵器を十個以上持っているんだ。それくらい簡単だろ」

またしてもぴくりと動く。正直見ていると、別の生き物のようで気色悪いことこの上ない。

「温情をかけられて万々歳」

「焼き肉のタレ？　牛のマミー？」

「ばーか。万事解決ってことだよ。相手は温情をかけてくれた我が社に感謝感謝。何かがあれば、こちらに依頼をしてきてくれる」

「よし、それでいこう！」

むっくりと起き上がりながら、そういうと携帯とバニラシェイクを両手に片手で入力。その速さ、わずか一分弱。それからのシナリオは大抵、こいつの頭の中で再構成をされていると思う。こいつは根本的な発想の最初が思いつかないだけで、それを応用した考えは、米国の某コンピューター会社とやり合おうとも二回戦い一回、勝つことのできるやり手。

このプランは速さが最も重要なことだ。どの国よりも先に村の人

の遺族達の依頼を聞きつけ、最低でも三年程度、継続的にそれを続ける。犯人の究明が必要なら、でっち上げた最高刑を受けた犯人に仕立て上げ、野放しにし、捕まえたあと、殺害を決行する。

こいつは自分で考えはしないが、肝心なところは忘れてはいない。

「お代官様。お代官様」

「なんだ越後屋」

呼ばれたので返事。

「これをレポートにして出せば？」

「……宿題は終わって、遊ぶ時間が生まれる」

「わお、りありー」

母国ではない英語を使う奴。その眼は期待に輝いていたようないなかったような。

「ざっつらいと」

何かと反射的に答えてしまった。

１９９９年、一月二十四日、十二時八分。

梶間義人はこの後、なおも疲れがたまって家に帰ることをこの時、考えてはいなかった。

■

彼は山中を駆ける。小枝ははじき飛び、右手に持ちし、剣を振り、目の前の大木を両断。強靭な脚力と共に人が決して通る事の出来ない滝から顔を覗き出した岩を足場にし、それをなんなく超える。

人里を避けながら、走り続けてかれこれろ九時間。素の速さは軽自動車を遥かに凌駕する。

人体では双方とも到底できない技ではあるが、今の彼にとってはそれほど造作に感じることではなかった。狂戦士で合って、狂戦士ではあらず。彼には神と魔の徒しか扱えぬ業を一時的に扱えられるように主から施された。

その一つとして、部分的な明確なる狂戦士化。毛皮をかぶることで理性を肉体から引き離し、抱かれた感情のままに戦う殺人兵器となる術式。既に右腕と脚は既に浸食を行い、標的の距離を詰める為に扱っている。

臭い。悪臭。ひどく薄汚れた血の臭い。ここまで遠ざかっていようとも、この感覚は自分の人生を完膚無きままに破壊したあの男を連想させるような感覚。そして、もう一つはいつぞやのあの人か。

湧き出てくるのは自我を崩壊しかけておいても、表現には困らないどす黒い感情。

解っている。なぜ、心の器に収まりきらないのかは理解している。

――あの男だ。素の隣にいるのは、菩提樹の下、伝説を樹立させたあの男だ。

金でできた鞘が砕けるのではなく、潰れる。

私怨。それは最も人間という生物が抱く最大の大罪。それを作り出すのは大きなことから細かいこと。

人間は、豊かな土地を求め、魔の徒は己の力をこの世に知らしめるため戦い、神話の神々は浮気や若き日の過ちを暴露され、全面戦争の宣告を起こし、それがやがて人殺しなどを行ったことのないものを巻き込み、抱き出す。

自分もその一人、故に――となるはずだった人物から、復讐は禁じられていた。彼もそれの考え方には賛同を抱いていた。元来、一族の中でもそれほど闘うことには弟よりも長けておらず、血が草を染める戦いがなくても生きられるそんな俄然とした自身が己の身にはあったし、あまり人に嫌われることは好きではない。

故に剣を置き、国民のための政治を行うつもりであった。

だが、自分はあの男に人生をひき肉のように完膚無きままに潰された。

いかにして許すことができようか。

物語でも語らてきたように彼女の髪の毛からつま先まで愛していて、母の力を借り、世にも美しい彼女を妃にすることに成功を果たした。

訪れる煌びやかな幸福。彼女は彼女で妃になる前から自分を拒む光景はあらず、自分を受け入れてくれるのだそう信じ切っていた。

だが、己れの妻となった女は他の男ととある契約を果たし、自分にとある予言を行った。

『三人のうち一人が死ねば、二人目が死に三人目が生き残る』

己は物陰に、隠れ泣いた。子供のように泣きじゃくった。

何故、こんな誓いを立てたのだ。

何故、自分は、僕は彼女の寵愛を受けられないのだ。

僕と『　　』との違いは何なのだ。

今でも思い浮かぶことのできる仕方なさそうな顔。それを思い浮かべるごとに考えはまとまることはない。

彼の心の中では、残された決断は一つだった。

己は男と彼女がたてた近いで彼女を失うことを恐れ、親族に話すことはなく、実の弟にこう頼んだのだ。

内密に『　　』を殺して欲しいと。

武に長けた弟は強く拒んだ。その利己的な考えで妹を悲しませたくはない。

何度も頼んだ。何度も何度も。最後には頭を下げ、弟は首を縦に振り、暗殺を決行することになる。

どこかしら不穏な雰囲気を感じたのか、暗殺のことを考慮していたのか、男は武に長けた弟から距離を置き、仲が崩れかかっていたのだ。

弟は暗殺を決行する。報酬は最も欲しがっていたのは彼が龍の巣から持って帰った古の剣。

財力を招く代わりに、猛者達を集める呪われし大剣。

思えば、この願いにこめられた感情はすでに愛ではなかったのだ。
近しい感情というのならば、物へ対する独占欲と同義にしてもかまわない。
形の整った顔の人間を望むのは決して恥じるべき行為ではなく、怒りを向ける行為でもない。
そして、それは決して人間としてではなく、生物として己の子孫を残すための誇り高き行動だ。
彼は義理の弟の命よりも自分の利を選び、

弟の命も犠牲にした。
菩提樹の葉の形をした痣に剣が吸い込まれる。
同時に投げられる2メイルを超す大剣。
弟は上半身と下半身を絶たれ、床にたたきつけられると同時に眠るように息を引き取る。
男は駆けつけてきた彼女に自分の思いを伝え、彼女の胸を短剣で突き刺し、彼女と共に死ぬんだ。

現代まで語り継がれる物語は悲哀にて閉幕。
物語として語られている部分は幾分か続き、王となり、政治に費やした日々を超え、枯れ木の様な指になった彼の人生は多くの子孫に見守られながら閉幕した。

未練はない。妹とは中を元に戻せた。
だが、自分の胸にはむなしくもどこか空白が残った。

彼と彼女はこの世で愛することのできなかったことに涙を流し、天に召された。
一方で自分はただ悲しく己の選択に何が間違ったのか、理解ので

きないまま死んでいく。

後ほど精神が分解される中、自分の人生は人のあこがれによって作られた空想上の話であることを彼は知った。しかし、自分は確かにそこに生きていたのだ。

恋をし、子供を作り、そこに生きた。

今の世も物語なのかもしれない。

だが、彼女が自ら死を選んだように、自分も運命を変えることができる。

彼は東京都内を一望できる場所に立ち止まる。

全ては我が幸福の為に。

例え、燃え尽きようとも貴方だけはここで手に入れよう。

第二話　胎動（後書き）

イレギュラー登場。大抵は金と悪口と女ごとと功名で人間関係は崩壊する。大幅に改編しましたから、そこまで量があるとは思えません。

決戦（前書き）

長くなります。多分。

3

生理的に受け付けない空間。暗い場所、不気味な場所、狭いところ、高いところ、その他もろもろとあるようなのだが、中々克服できない人が近年の日本では増加の一方を辿り、梶間義人という猿もその中に入っている。

密閉されている空間。それがどんどんと上にのぼっていく感覚が余計に脳の悪酔いを起こさせる。

場所はエレベーター。この動く密室に俺と同席しているのは、これまた世にも珍しい銀の髪を持った外人。

十三歳の時、ひどい嘔吐に見舞われた以来だ。こうして、背中をさすられながらも、とても気まずい心境を心に抱くのは。

理由は普通に考えれば、少なからずこいつのような馬鹿でも察することはできる。

俺達のほかに、二名、この密室の中にいたのだ。

妥当していただけただろうか。一人は女性。一人は女の子。関係的には娘と母親ってことが一目瞭然。教育上あまり見せてはいけない光景に、エレベーターの端によってなるべく話しかけられないように気配を消すこともなく、こちらに対応してくれる。

初春に近づいてきたとはいえ、まだ肌寒いのか着衣している服装は、厚着のジャンバーに際ものでは無かったら、どんなものでも合

うジーンズ。親子そろってか、どっかの馬鹿親子を想像してしまうのはだいぶ失礼だと思う。

年にしては二十代前半。子供の方はもう幼稚園を卒業するころなのだが、平日なのにこんなところに訪れるのは、とても珍しい。旅行客なら、家族一緒に登るのだろうが、おそらくは東京タワーの展望台に設置されているレストランなどで食事を済まそうとする変り種と推測されても仕方がない。

それは体を擦る力を緩めない。

その光景に何かできることはないのか、と考えたのか、女の子の方も背中をゆっくりと強く擦ってくれる。

同席していた女性は自分の娘と一緒になって、高所に入った時点で気分を悪くした男の背中を擦っているソレが金次第で無差別テロさえも決行する女社長とは到底、思っていないからこそ娘の行動を許している。そう考えれば、知らなくてもいいことも、騙しも場合によれば、正しいという言葉は納得がいく。

とはいえ、三人とも心配そうにしてくれるのはいいのだが、

「義人？　義人……はきそうなの？」

「あぁ」

「吐く！　お母さん、お兄ちゃん吐くの！」

「ゴミ袋あったかしら」

軽くこの密室でパニックになっているのは、どうにかしてほしい。

あのぐわっとくる浮遊感が駄目だ。エレベーターが急上昇するとき口から、腹の中のモツが飛びそうだ。わずか一分程度。されども一秒程度。どんなにごまかされようとも俺にとっては耐えがたい苦痛でもある。

「どこが悪いの？　お腹？　食べ過ぎた？」

「そ、――」

言葉を出すこともできないから、首を上下に軽く振り、肯定の意を表す。

食べ過ぎからの急激な上昇。そりゃ吐きかけるさ。本当にてんぱっているソレにだいぶ詰まっている腹の脂肪をぐわしっとつかまれ、ぐわんぐわんとかき回される。勿論、俺は答えられなかった。よけいに吐き気がたまっていき、酸っぱいにおいが喉を駆けあがって、中途半端なところで下へとスカイダイビングをする大学生のようにあっという間に落ちていく。

静寂。

答えることのできない俺へのあてつけか、はーっとわざとらしい溜息をつきながら、答えになってないと一言。外見上は憤慨しているように思えるが、こいつはいたって常に冷静である。

俺自身、こいつが本気で怒ったことはあまり見たことはない。一月ほど前、タイで起こった人身売買事件での仕打ち。ブラックマーケットに出展することを生きがいとしていた下衆の両手の指を全部砕いてサバットキックを叩きこんだ位だ。

今の心境としてはどちらでもあって、どちらでもない。一つは不快な思いをさせてしまったことへの申し訳なさ、もう一つは俺に対する怒り。今はこの子がいるんで教育上、見せてはいけないことを考慮しているのか、いらだちに任せて突発的な武力制裁を行ってくる気配はない。

逆に言うならば、ここで吐瀉するならば、蹴りを一撃鳩尾に見舞われる羽目になる。

ようやく腹は落ち着いてくる。手すりを握り締めなおし、膝を起こす。

揺れる視界。波の高い日に船に乗ったような錯覚。

左脇に両手を通され、持ちあげられるような形でソレに体を支えられている。

力が抜けきっているのによくもまぁ、力の付きにくい体で支え、苦悶の一つも顔に出さないところから、こいつが根からの人外だって事を結論付けていて、このままいっそ怪力女と言ってやりたいところなのだが、頭部を潰されかけるからそれはやめよう。

「すみません。連れがこんな形になってしまって」

簡潔な謝罪。それに対して、女性は笑いながら、こう答える。

「いいえ、どういたしまして」

次第に停止。目の前にはこちらが出るのを待っている少し年下ぐらいの男女二名。平日とはいえ、さぼってきたのか、それとも学校が臨時的な休校になったのか。おそらくは後者。

徐々に戻ってくる生きた心地。脚を踏み、ゆっくりと地を踏みしめる。

目の前に広がるのは、頑丈そうな鉄筋が目に付く広々とした空間。二階には小さいがお土産売り場など三店舗ほどが立ち並んでいる。

「おおー広い」

「広いな」

ほぼ同時。あまり感情を移入していなかったのか、奴は口を抑え、盛大に一瞬だけこらえていた笑い噴き出す。こいつの笑いのつぼは到底理解ができない。

「ほんとーに、感情を込めていないのねー」

「悪いかよ」

「いいえ、本心を言ったまでです」

久々に上った真っ赤なタワー。都心の中途半端なオフィスビルよりも遥かに高く、景色もいい。この展望台から地上までの距離約１３０ｍ。東京都の中でも最も高い建造物という言葉はうなづける。

左右を見渡しても、見えてくるのは快晴の空ばかり。たまにあれがいるだけで普段、生活している都内は自分の足もとに。神様はこんな形でこの世界を覗いているのだろうか？

ゆっくりと歩いていて、ふと、思ったはもっとある。

人気があまりにもないのだ。いるとしても、土産屋のアルバイトな女子大生と複数の人間。施設内にいる受付嬢。そして、十数名程度の一般人だ。

一般人は幅広い。上が腰が完全に曲がりきった田舎によくいそうなおばあちゃん。下が肩車をされて嬉しそうな三歳児程度の幼児。

何もかも出来過ぎだ。当たりを見回す度に移り変わりが激しく。両親と一緒にきた幼児が降り、俺と同じ年くらいの男女四名が真っ赤なタワーの体内へとはいってくる。

俺たちみたいにここに来ているのは観光客だ。日本にきた留学生と大学院教授らしき女性。

心の底からこの観光名所を楽しんでいるこいつは気が付いていないのかもしれなったが、あまりにも情景としては出来過ぎている空間が出来上がっていたんだ。

どこか、掴みどころのない嫌な雰囲気が漂う。

最初に思い浮かんだのが、テロ。爆破物による電波障害を起こし、驚異的な力を見せつけようと思う輩もいるのだが、すぐさまその可能性を否定。

理由として挙げるのなら、ナンセンス。

東京タワーは巨大な電波受信装置と言っても過言ではない。各テレビ、ラジオ局が東京都、近隣の県などに電波を受信し、首都の情報をなりたてている。

その真っ赤なタワーを崩壊すればどうであろうか。東京タワーの全壊、一部、外国人の閉鎖、一番初めに首都に流れる情報の麻痺から民放から流れる夕方の全国版のニュースは休業し、犯人の調査など必要以上に警戒を怠らない必要が出てくる。

よほど、自信のある人間じゃないと決行のできない作戦だ。可能性としてはとても低い。

二つ目には気のせい。

三つ目はあの化け物の出現。それだけはなんとしてでも免れたい最悪の事態だ。

近くの椅子に腰を下ろす。手には常に持参している自動販売機で買ったペットボトル。

「流石、東京タワー。吐瀉未遂も許してくれるとは」

……外国人の偏見が高まりそうだ。

平均的な胸を張りながら、我が物顔でそういうそれに注意をする気も失せた。

「あぁ、そう」

漏れる感嘆詞。自然とポケットの中からは久々のやにが。

吸うべきが吸わないべきか、そう迷っていると。

右前方二メートル地点、お土産売り場前。涙をにじませた女の子が立っており、誰もが見て見ぬふりを徹している光景が目に入る。

ショートヘアに厚着のジャンバー。発育が遅いためか、ジャンバーが男の子が生まれた桃と間違えてもおかしくはない。

……見覚えがある。どこかで見覚えがある。

一言でいえば、間違いないこととしたら同じ町内。

隣に座ったアレが給水した後、こう呟く。

「迷子かな」

「……眼は正常。耳はどうだ」

「正常。お母さんかな？　やっぱり」

「その可能性が一番高い。ばーやんやじーやんの存在も否定できないが、基本平日だからな。父親は会社に出勤。ならば、必然的にお母さんになるのが当たり前だろう」

「え、月曜日、休みのところとかないの？」

「企業ではない。あるとすれば、整髪店だな」

徐々に話をずらす。面倒事は勘弁だ。

「うん、連れて行きましょう」

軽い挑発を無視し、動きだす。人に好かれる面では俺よりもあれの方が秀でている。それに同姓だ。なんとかうまくやっていくはず——だったのだが。

泣きだす。盛大に泣きだす。子供などめったに接することのないアレはおろおろと、辺りを見回し、どうするべきか悩みだし、説得を試みたのだが、さらに拍車のかかった泣き声に耳を突っ込む。

泣いている方も禁句を呟いた方も錯乱状態。

視線だけでこちらの援護を頼んでいるようだが、そんなことじゃ動くつもりもない。

数秒。数十秒。やがて眼や体が冷めていき、俺が動かないことが解ったかのようにゆっくりと階段に向い、下の階へと降りる。

しばらくするとゆっくりと手を引いてこちらにやってくる。女の子の手には飴。その眼はどこか姪が拗ねた時よりも、ふてくされている。この子が泣いたというよりも１００％手伝わなかった俺に対しての態度だ。

「いい社会勉強だったろ？　日本の高校では、特別授業としてこんなことをやらされることが年に一回、二回あるんだよ」

「いい社会勉強でしたー。でも、義人さんはなんで動いてくれなかったんですかー」

「動きたくなかったから」

沈黙。はーっとため息をつきながら、自分の髪と対照的な黒いセーターの襟を直し、少女を俺の膝の上へ。自分は俺の隣に座り、一息。

訪れる長い沈黙。勿論この間も雑談するわけがなく、三者別々の

態度が続く。アレはせわしく携帯電話のキーを打ち、膝の上の子はおどおどと。俺は特にやることもなく、展望台から見える空の景色が変化するのを見ていた。

時間がゆっくりと過ぎる。三分たったと思ったら、一分。

待っても、誰も来ない。

「探しに行くか」

「え？」

訓練されていない猿が字を書いたところを見た姉の様な顔をするんじゃない。俺はれっきとした人間の胎盤から生まれて、他の人間よりもちょっとだけ、再生能力、身体能力が強いだけのモンゴロイドだ。

「探しにいくぞ。この子のお母さんを」

この子をケツが右腕の肘から先に乗るような形で持ち上げ、椅子から降りる。こちらの粗を発見した様な目つきでこちらを見てくる。渋谷、原宿の女の子とはある意味違って、母親向きの思考として考えられないタイプだ。

こいつの反応に女の子は戸惑う。それもそうだ。このご時世、こんな女が流通している。

だから、こいつの連れとみられている俺がこの子を連れて行くのには、この子にとって仲間割れと考えられているかもしれない。

何分、何秒たったか。ぎゅっと服に架かる小さな力。見れば、小さい手で女の子は俺の服を握りしめられていた。

■

青く澄んだ空に浮かぶような雲。それと同等の色に見える其れは白い塗料で対反射処理をされていた一級品。東京タワーの上空に現れた人影にとって、それは降るものではなく、投げるもの。到底、耐えられない強度。

拳が軋む。今にもとびかかりたい感情を抑える。

ゆっくり、ゆっくりと。握られた右腕が引かれるような形で、刃先が天へと向かう。

一秒。手首から先が文字通り、消える。

二秒。ゆったりとしたモーションの傍ら故か、腕を振る速さは生きる者の命を刈り取る死神の鎌のよう。

そして、三秒。全てのニンゲンが死にいたる一撃は轟音を立てて、目標を駆りたてる。

4

衝撃。悲鳴が聞こえ、腕に乗っている少女は何が起こったのか理解できていなかったのか、目を大きく見開き、呆然と頭上を見ていた。

地割れのように崩れ落ちる床。立ち上がれずただただ悲鳴を上げ、死がやって来るのを待っている多くの一般人。初めての経験だが、どうすればいいのか、それだけは脳が回答を用意してくれた。

跳べ。生き残る方法はそれしかない。

こちらに手を伸ばしてくるアレ。文字通り地上へと落下するがれきの中を蹴り、わずかに残った足場へと向かう。この瓦礫の中、直線に飛べる軌道は一切ない。一人の力では、届かず、地上へと叩きつけられることは確実。

歯牙をかみしめる。膝を曲げ、屈伸ができる限り、フル活用できるように脱力を図る。

その際、力を込めすぎたのか、ガギッと歯が砕ける音が口内に響くが、集中力が勝ったのか、痛みはそれほど感じることはなかった。

方向は右上。足場は頭上に天井と横の支えとなった鉄骨に、天井に使われていた鉄の大きな破片が真横。そして、その中に見える中国刀。それ以外、蹴って推進力になれるものはなかった。

目標が決まった。後は実行に移すだけ。屈伸を解き放ち、まずは頭上の足場に着地。休むことなく、位置づけ的に下になった鉄板に向って、落ちるような形で飛ぶ。

後、一つ。上空に飛び、右足の横にあるそれを蹴り――――

ぎりぎり届かない位置に身を投げ、左手を突き出す。

「よっしゃ、まかせときなさい！」

聞こえる士気の高まった叫び声。手首に万力で絞められたような痛みを感じる。

――――脱出成功。片手で鉄棒にぶら下がる学生のように、宙ぶらりんの姿勢になっているが、ここまでうまくいくとは考えてはいなかった。

俺達を巻き込んだこの人為的な災害は倒壊というよりも爆風といったほうが正しい。

決戦（後書き）

熱いですよね。でかい傷負ったとき。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3935v/

Ragnarok　saga

2011年11月17日04時53分発行